

# 『シャーロット王女の死に関する国民への声明』と 選挙法改正

——シェリー研究 (20)——

議会改革はあらゆる種類の経済的改善の前提として要求された。  
——トレヴェリアン<sup>1)</sup>

小 林 龍 一

1817年11月6日、シャーロット王女が出産の際に死亡した。そしてその翌日、「大逆罪」の名のもとにブランドレス (Jeremiah Brandreth)、ターナー (William Turner)、ラドラム (Isaac Ludlam) の3名がダービーシャーの州都ダービーで処刑された。11月9日(日)付の『イグザミナー』は冒頭で王女の死を詳細に報じるとともに、11~13ページに処刑の記事を載せている。同紙によって二つの事件を知ったシェリーは『シャーロット王女の死に関する国民への声明』(An Address to the People on the Death of Princess Charlotte——以下『声明』)を書いた。<sup>2)</sup> 本稿ではこのパンフレットをもとに、シェリーが3名の処刑の本質をいかなるものであると見たのかを考えてみた。

なお、参考として巻末に、1817年11月9日(日)付『イグザミナー』第515号の第1ページを掲げるとともに、処刑を報じた部分を翻刻して添えておいた。

## (1) 「庶民階級の女性の死」と「王女の死」

当時の言論関係者は、執筆者はいうまでもなく出版業者も、常に告発の危険にさらされていたので、それに対する配慮が必要であった。そのためであろうか、『イグザミナー』はまず王女の記事を載せ、処刑のそれを後ろのほうに切り離して目立たぬ形で掲載している。しかもその論調はジャーナリズムの原則に従って客観的である——もっとも、その次の号(1817年11月16日)はそうではないが、11章から成るこの『声明』もまた、告発を懸念して『イグザミナー』の配列にならない王女のことから始めている。「問題は大胆ながら慎重に」扱われているのである。<sup>3)</sup>

1) 『イギリス史』第3巻、118ページ。

2) 参考：拙訳「P.B. シェリー『シャーロット王女の死に関する国民への声明』」(『大阪経大論集』第54巻第1号、2003年5月)。

3) シェリーの手紙——「先日の夜、私たちが話し合ったことをパンフレットにしたものを同封します。一刻も早く印刷に回してほしいのです。分量は前のパンフレット [小林注——『イギリス全土で議会改革の是非を投票に委ねようという提案』(A Proposal for Putting Reform to the Vote throughout the

まずその第1章では王女の死について述べてはいるものの、それは一般の女性の死と変わらないという捉えかたをしている。

第2章では、王女と同じようにお産の床で死ぬ多数の極貧の女性について「彼女たちには愛情がないというのか？ 彼女たちの心臓は鼓動しないというのか？ 彼女たちの目に涙があふれることはないというのか？ 彼女たちは血の通った人間ではないというのか？」と述べて、彼女たちが王女と同じ人間でありながらその死がいかに惨めであるかを述べている。

第3章では、「国家に貢献した者を悼むことは、われわれの最高の愛情を醸成するのにいっそう適した敬愛のこもった慣習である」と述べて、王女がそれに値しないことをほのめかしている。また、「人が、自国や世界に降りかかったどんな社会的な不幸をも、たとえそれが死ではないとしても、悼むこともまた当然であろう」と、社会的な不幸の犠牲者も悼むべきだと述べて、処刑された3名がそれに当てはまることをほのめかしている。

第4章では、「(葬儀の)性格は特殊なものではなく普遍的なものであるべきなのだ」と、死んだのが王女だからといって特別な扱いをすべきではなく、広く人間の死として捉えられるべきだと言っている。

第5章では、「個人的な優秀性において彼女(=王女)と同様に優れながら若い命と希望を奪われた人は他にも多数いたのだ。出産の際の事故が彼女の人生をより高潔にしたわけでもなく、その死を嘆きに値するものにしたわけでもない。彼女は大眾にとって毒にも薬にもならなかった」と述べて、彼女が王女として何の特長も発揮せず、したがってその死も庶民のそれとなんら変わらないと指摘している。

## (2) 処刑された3名の死の意味

そして第6章では、シェリーは処刑された3名の家庭や家族に思いを馳せる。それは王女のそれに勝るとも劣らぬほど愛情に満ちたものであった。家族たちは刑場のそばの一室に居て群衆の声や足音で死を知った。その苦痛や悲しみはシェリーの心を強く打ったのである。彼らは「犠牲者の現在および将来の苦しみについても知らず、また、それを考えもしない第三者によって無限の深淵に無造作に突き落とされた」のである。そして、「いかなる原因にもせよ、人間が人間の命を奪うことほど恐ろしいことはない」、「人間が人間の血を流すと、復讐・憎しみ・延々と続く処刑・暗殺・追放が果てしなく続くのである」と暴力で物事を解決しようとする政府のやり方を批判している。

第7章では、「これら不運な人たちの死につながった事件は、社会全体の不幸なのである」、すなわち、政府の弾圧が3名の死を招いたのであるから社会全体で嘆くべき不幸で

---

*Kingdom*) を指す] を上回るとは思いませんが、印刷業者に早速にも取りかかっただき、私にゲラを送ってください。原稿の残りは日が暮れるまでにお送りします。問題は大胆ながら慎重に扱われていますので私は大丈夫だと思うのですが、出版にあたって支障があるようでしたら、全体の印刷が終わってタイトルをつける前にただちにお知らせください」。(1817年11月12日付、出版業者チャールズ・オリアー宛、*Letters*, Vol. I, p. 566.)

あると言っている。そして、「絞首と斬首による三人の死と、その死が特異で重大であるという事情が、イギリス国民が癒しがたい悲しみを以て悼むべき不幸を構成しているのである」と、処刑の残酷さとその死が社会的に持つ特別かつ重大な意味のゆえに全国民がその死を悼むべきであると述べている。

### (3) 選挙法改正

ところで、当時の社会状況はどのようであったかを見てみよう。つまり、結果としての3名の処刑の背景にはどのような原因があったのかということである。それには当時のイギリス国内における経済状況が深くかかわっていた。

1815年、ナポレオン戦争が終結して平和が回復したが、再び保守反動の時代が続いたのである――

戦争終結と共に物価が下落したが、予期に反して外国市場の購買力の減少、企業・銀行の破産、農業の不況、労賃の低下、労働者の失業などイギリス経済は大不況期にはいった。しかも地主議会は地主や農業資本家の利益擁護のため、一八一五年穀物法を制定し、穀物価格の引上げ策を講じたので、労働階級は二重の苦痛を受けることとなった。穀物価格の騰貴は新興商工業階級にもまたはなはだしい不利をもたらした。翌年議会は所得税を廃止したが、これは間接税増徴となり、所有階級には有利であったが、貧民階級の負担を増大した。ここにおいてハント、コベットの急進主義者が国債支払の停止、議会改革を標榜して政治運動を展開し、ますます窮迫する工場地帯では急進的労働運動が大規模に復活し、不穏な空気がみなぎった。コベットは「ウィークリー＝ポリティカル＝レジスタ」紙を発刊して工場労働者に訴え、労働階級運動を議会改革すなわち選挙法改正運動の方向に導いた。ハントは直接その雄弁をもって労働階級運動を指導した。政府と議会は恐怖の念をひきおこし、つぎつぎと弾圧手段を採り、一八一七年には再び人身保護法を停止し、いっさいの集会を治安判事の監督下に置き、すべての危険な運動を油断なく鎮圧するよう命令して、反逆的・煽動的言説を厳罰に処し、急進主義者の多数を投獄した。<sup>4)</sup>

つまり、労働者階級は「ナポレオン戦争後の不況」と「穀物法の制定」、「所得税の廃止」によって苦境に陥り、急進的労働運動が復活し、急進主義者たちはそれを議会改革すなわち選挙法改正運動へと導いた。これに対して政府は「人身保護法」を停止するとともに、運動を容赦なく弾圧した、ということである。

シェリーも第8章で同様のことを言っている――

われわれの代表によるいびつな構成の議会在少数の貴族の手に握られた政府は、ウィリアム三世の大臣たちによってデッチあげられた、国債による歳入を当てにする方策を推し進め、あげくの果てに莫大な負債を発生させた。フランスに対する戦争において、この政策は現在に至るまで継続され、国債の「利息」だけで、国家予算のうち、

4) 大野，212-3ページ。

常備軍・王室・家臣・役人を維持するために惜しげもなく浪費されている分の二倍以上に達している。この負債の結果、社会的なまとまりと文化的な生活の基盤を奪うといったような、生活費の非常に不平等な配分を産むことになる。それは、これまでも十分に重い負担になっていた貴族のほかに新たな貴族階級を産み出し、以前の二倍の人々に勤勉で貧しい人々が生産した物で贅沢かつ怠惰な生活をする権利を与えているのである。

引用文中の「役人」(placeman)とは、選挙協力の見返りとして任命された役人である。<sup>5)</sup> また、「新たな貴族階級」とは産業革命の進行とともに勃興した地主階級のことである。彼らは「国債に投機をしたり政府におべっかを使ったり卑劣な取引をしたりして、公の債権者という称号の権利を得た、つまらないくだらない奴隷根性の持ち主」であった。要するに、国債の乱発による政府の経済政策の破綻が第二の貴族階級、すなわち地主貴族を産み出し、この二重の貴族階級(a double aristocracy)によって、民衆は貧苦にあえぎ差別と社会的混乱にさらされていると指摘している。シェリーは当時の政治・経済状況を正確に把握していたと言えるだろう。

そして、政府の経済政策の破綻によって国民は国債の利払いのための年額4,000万ポンドの負担にあえいでおり、この状況を打開するための手段は「自由な選挙制度」すなわち選挙法改正しかありえない、と言うのである――

民衆は大声で、国民の自由な選挙制度を要求した。人間が造ったどんな政体も差し迫る困難に対応することができないということが感じられ始めたのである。国家の必要経費を永久に超え続ける、年額4,000万ポンドの支払いに対する解決策の有無に関する問題に対処することができるのは国民以外にない。(中略)自由を愛する気持ちと愛国心とそういった輝かしい感情に付き従う自尊心が人々の胸のうちに蘇った。政府の方針は破綻したのである。

もちろん、政府は国民の要求に弾圧を以て応じた。その一つとして3名の処刑があったのである。

第9章では、当時の労働運動が二重の貴族制度を打破するために「国民の自由な選挙制度」すなわち選挙法改正を求めたということが述べられている。「ダービーシャーの暴動」(Derbyshire Insurrection)<sup>6)</sup>もその一例であった――

イギリスの工場地帯には長年にわたって政府への不平と不満が広がっていた。これは先に述べた原因によって出来た二重の貴族制度の結果である。贅沢の犠牲者である製造業者はこの制度によって、愛情もなく健康もなく、貧困の不安と危険によって産み出される動揺と浪費の社会状況を無効にするような知識を身につける暇も機会もなく、飢えたまま放置されている。ここに、どんな目的であろうと数人の無知な人間を不法な行為へ駆り立てたいという策謀家にとって願ってもない場があった。国民の自

5) 『ランダムハウス英和大辞典』。

6) Cameron, p.125.

由な選挙制度の要求は、もしなんらかの威嚇と不利益が用意されなければ、認められざるを得ないということが明らかになると直ちに、最も恐ろしい残虐行為の陰謀がつきつぎに準備された。

高まる労働運動を弾圧するために「すべての民衆が議会制度改革を求める声を上げるや、直ちにスパイが放たれ」、「飢えた無知な数人の製造業者はこういった無慈悲で血に飢えた陰謀家による甘い約束に惑わされて、国家に対する反逆と呼ばれるものに結集」したのである。そして、「議会は行政府に対し新たに特別な権限を与えた」とあるが、これは前述の「人身保護法の停止」を指すのであろう。なお、同年すなわち1817年、政府はさらに「集会禁止法」も議會を通過させている。権力者が反政府運動に対して用いる常套手段であるが、時の政府もスパイを放つての運動内部からの切り崩しと法律による非合法化という手段を用いて、とにかくふりかまわず弾圧に乗り出したことが分かる。シェリーは最後に、「われわれが選ぶべきものは、専制政治か革命か改革である」と締めくくっている。彼の認識では事態はそこまで切迫しているということである。

#### (4) 3名の処刑

第10章は『イグザミナー』の記事にもとづく、3名の処刑の様子である。彼らは、絞首刑にされただけでなく、さらに斧でその首を切り落とされて群衆に向かって突きつけられ、そのうち、さらし首にされた、という惨いものであった。ラドラムは神に祈りつつ処刑され、苦しみつつ息絶えたが、ブランドレスは「オリバーが俺をこんな目に合わせやがったのだ。オリバーがいなけりゃ、俺はこんな所に来なかったろう」とつぶやいた。オリバーとは、当時の悪名高きスパイであった。<sup>7)</sup> 彼はまた、見物人に向かって「神が諸君やカーズルレーと共にあらんことを」と叫んだ。当時、カーズルレーは外相であったが、社会運動弾圧の元凶でもあった。これはブランドレスの精一杯の皮肉であったと言えよう。ターナーは首にロープを巻きつけられながら「これはすべてオリバーと政府の仕業だ」と叫んだという。シェリーはつぎのように述べて、スパイと政府を非難している――

いかなる目的のためであるにせよ、人間の血と苦しみのこのような恐ろしい噴出によって目的を達するような陰謀を是認する人間がわれわれを支配するのに耐えることは国民の不幸である。しかし、その目的が、われわれの権利や自由を永久に踏みにじること――無秩序か圧制かの二者択一をわれわれに迫り、驚いた国民が圧制を受け入れるなら弾圧を加えること――膨大な常備軍を維持し、彼らがすでに返済不能であることを知っている国債を年々増加させること――そして、それを継続する妄想が破綻すると、無防備の貧民に飢餓と退廃を生み続けたのと同じだけの窮乏と混乱を社会のすべての階級の人々に産み出すであろうこと――彼らの気に障る人々を意のままに投獄し中傷すること――こういったことがその陰謀の、目的ではないにしても結果であ

7) オリバーの行動および処刑後の活動家たちの動きについては〔補記〕の「キャメロン氏の見解」に詳しい。

るなら、われわれはどうして嘆き悲しまずにはいられようか？

### (5) 自由を求めて

第11章は、シェリーの究極の願いを述べた章である——

鉄よりも重い重圧がわれわれの上のしかかっている。というのも、それはわれわれの魂を束縛するからだ。われわれは湿っぽくて狭い囲いよりもっと悪疫が発生しやすいような牢の中を動き回っている。というのも、足元にあるのはその床であり、頭上にあるのはその屋根だからである。さあ、ゆっくりと畏敬の念を込めて「イギリスの自由」の亡骸<sup>なきがら</sup>に付き従って墓場へ行こう。そして、栄光に満ちた「幻影」のようなものが現れ、折れた剣と笏と王冠から成る王座を踏みつぶして埃にまみれさせたなら、『自由の精神』が墓からよみがえり、野蛮で許しがたいすべてのものをそこに打ち捨ててきたのだ」と言おう。そして、膝まづいて、それをわれわれの「女王」として崇めよう。

シェリーは当時の社会を自由のない閉塞状況にあると見た。そして、3名の死を「イギリスの自由」の死であると考えた。それだからこそ、選挙法改正を通じて自由な社会の到来を願ったのである。

選挙法改正は当時の民衆にとって最大の政治目標であり、これを求める運動が全国的に高まっていた。シェリーはその動きを受けて、3名が処刑されたのと同じ年、すなわち1817年のすでに3月に『イギリス全土で議会改革の是非を投票に委ねようという提案』を出版している。<sup>8)</sup> 3名の処刑はその運動に対する政府の弾圧のひとつであった。「声明」はその性格上、具体的な事実を提示して広く社会に訴え受け入れられることを目的にしている。しかし、われわれは王女の死に関する記述に関してはもちろんのこと、処刑された3名に関する詳細な記述についても、それらの現象面に目を奪われることなく、シェリーが時代の流れの中で大局的にこの「事件」を捉えていたという点を見逃してはならない。

政府の弾圧は1819年8月16日の「ピータールーの虐殺」<sup>9)</sup>で頂点に達したが、その後、幾多の紆余曲折を経て1832年6月7日、やっと第一次選挙法改正案が議会を通過し、イギリスにおける選挙法は改善の緒についたのである。

シェリーは『声明』において、経済的に破綻した政府に対して議会改革を求め、そのためには選挙法改正が必要であると訴えたのである。そしてさらに、選挙法改正を通じて自由を獲得し、それが人間の解放につながっていくことを願ったのだと言えよう。

8) 参考：拙論「シェリーの選挙法改正案—シェリー研究（19）—」（『大阪経大論集』第54巻第6号，2004年3月）。

9) 参考：① 拙論「*The Masque of Anarchy* 序論—シェリー研究（6）—」（『大阪経済大学教養部紀要』第2号，1984年12月）。

② 拙稿「(資料)『イグザミネー』(608号，609号)その他」（『大阪経済大学教養部紀要』第3号，1985年12月）。

③ 拙論「『無秩序の仮装行列』における非暴力的抵抗について—シェリー研究（7）—」（『大阪経済大学教養部紀要』第7号，1989年12月）。

## 〔補記〕 キャメロン氏の見解について

キャメロン氏は『声明』について以下のように述べているが、<sup>10)</sup> 筆者（＝小林）とは考えが異なる個所があるので、全文を掲げたくてコメントをしてみようと思う――

シェリーが1817年に書いた二番目の政治的パンフレット『シャーロット王女の死に関する国民への声明』は厳密には改革に関するものではなく、その年に改革家たちによって論じられた問題、すなわち、いわゆる「ダービーシャーの暴動」の指導者であった三人の労働者ブランドレス、ラDRAM、ターナーの処刑そのものを扱っているのである。トリー党政府は、ナポレオン戦争後の不況下に広がった社会不安に恐怖し、お決まりのオトリ捜査官 (*agent provocateur*) を雇って反政府デモを暴動に転化させたのである。そして、彼らは支持者の氣勢をそぐために「首謀者たち」を逮捕し、処刑するのが常であった。これらオトリ捜査官の中で最も悪名が高かったのは「オリバー」として知られる男（『三つの墓』においてチャールズ・ラムによって攻撃されている）であった。1817年の夏、「オリバー」はロンドンの「フィジカル・フォース党」(Physical Force Party) の代表だと称し、ダービーシャーの急進的労働者階級の諸組織に潜入することに成功した。これらのうちブランドレスに率いられた組織が、武装した労働者階級を率いてノッティンガムに至る計画をすでに立てていたかどうかは不明であり、その真相を知るとは困難である。というのも、ブランドレスやその支持者たちが裁判で証人台に立つことはなかったし、提出された証拠は主として政府のスパイからのものであったからである。確かに「オリバー」は、その陰謀において大きな役割を果たし、計画のすべてを企むか、ロンドンその他の地における支援暴動の話をして労働者を扇動した。とにかくブランドレスの「軍隊」は具体化しなかったものであり、その一団はノッティンガムに近づくころには人数が減り、そこで武装した右翼によって総崩れにされた。ブランドレスをはじめとするリーダーたちは裁判にかけられ、うち3人には死刑が宣告された。そして11月7日、すなわち王位継承者であったシャーロット王女が死んだ翌日、死刑が執行された。3人は絞首刑に処せられたのち斬首され、その首が群衆に高く掲げられた。

裁判でほとんど為すすべがなかった改革者たちは処刑によって目覚め、行動を起こした。『イグザミナー』は一面トップで政府を非難し、不当な流血の日に王女に対して国家的弔意を捧げることは不適切であると指摘した。『ブラック・ドゥワーフ』(*The Black Dwarf*) はもっと辛辣だった――「シャーロット王女の死の直後にダービーでの死刑に示されたような血なまぐさい出来事が起きたことは、嫌悪感を催させるとともに理解しがたい衝撃でもある。法に寄生する者は、ズタズタにされた死骸という御馳走を渴望するあまり、この葬儀が終わるまで断食をすることができなかったのか？」ヘンリー・ハントは改革派指導者の中でただ一人、ダービーでの裁判に出席し三人を救うために努力したが無駄に終わったので、今度は雄弁と組織の全力を挙げて政府に対する反感

---

10) Cameron, pp. 125-7.

を煽り立てた。コベットは自ら発刊する『ポリティカル・レジスター』の3号分の大部分をこの処刑のために割くとともに、ブランドレス夫人のために募金を始めた。しかし、すべての恐ろしいエピソードを刺激した最も強力で説得力のある声明はシェリーのパンフレットであった。

シェリーは、(バイロンの、どちらかといえば感傷的な美辞麗句とは対照的に) 王女の死に対して慇懃な遺憾の意を表しつつ、毎週多数の貧しい女性がお産で死んでいるのに、彼女たちに対して国家的な哀悼の意を表する日が無いと指摘している。彼は改革派の定期刊行物のやり方にならって、王女の死とダービーにおける処刑とを対比させてはいるが、以下のように、政治的扇動よりも人道主義にもとづく抗議を重視し、死刑廃止を提案している――

ブランドレス、ラDRAM、ターナーの処刑はシャーロット王女の死とはまったく異なる性格の出来事である。この3人は何か月間も劣悪な牢に閉じ込められていた。忌わしい死の恐怖と絶え間のない地獄の責め苦に苛まれ、最後に絞首台に連れて行かれ吊るされたのである。彼らは家庭を愛し、個人的善行の実践が顕著であった。おそらく、低い身分の彼らは、上流階級の人々とは異なり、そういった愛情の成長を促したことであろう。彼らには息子・兄弟姉妹・父がいたが、みんな彼らを愛していたように思える――シャーロット王女がその身分に関する法令によって彼女との永久の別離ができないでいた人々によって愛された以上に。彼女の夫は彼女にとって父・母・兄弟のようであった。ラDRAMとターナーは熟年であった。その愛情は彼らの心の中で熟成・強化されていた。これらの被害者の気持ちが語られることはないだろう。しかし、長く複雑であったにちがいない親族の苦痛は、エドワード・ターナーから推測できるかもしれない。彼は兄が板の台に乗せられて引き回されるのを見るや、恐ろしい叫び声をあげ失神してその場に倒れ、二人の役人によって死骸のように運び去られた。彼らにとって愛しくてたまらない首が胴から切り離されたことを群衆からあがる嵐のような恐怖の聲が告げた日に独りで座っていた彼らの苦痛はどれほど大きかったにちがいないことか！ そうなのだ――彼らは群衆の間から沸き起る猛烈な叫び声に耳を傾けていたのだ。彼らは、恐怖におびえた1万人の人々が殺到する足音と、ズタズタにされ表情の歪んだ首がそれから空中高く掲げられたことを知らしめるうめき声とわめき声を聞いた。殉難者が死んだのである。死とは何か？ それが墓のあとに来るものだと誰が言えようか？ ブランドレスは冷静で、われわれの誤りの結果が恐ろしい障壁によって阻まれたのだと信じていたことは明らかである。ラDRAMとターナーは、神によって永遠の劫火に投げ込まれるのではないかと恐れおののいていた。聖職者のピカリング氏は、ブランドレスがまちがった確信によって将来の支配者と和解する唯一の機会を失うことがないことを願っていたようだ。死とはどんなものであるかをだれも知らなかったし、知ることもできなかった。だがこれらの人々は、犠牲者の現在および未来の苦しみをほとんど知らず考えもしない第三者によって無限の深淵に無造作に突き落とされた



のである。

シェリーは、『イグザミネー』や『ブラック・ドゥウォーフ』が記したのと同様、ターナーが死刑執行人にロープを首に巻きつけられたとき「これはすべてオリバーと政府の仕業だ！」と叫んだところ、教戒師が死刑台に上り、手で彼の口をふさいだことを記して、政府によるスパイ制度を激しく非難している。彼は共和主義的な口調でつぎのように締めくくっている――

ゆっくりと畏敬の念を込めて「イギリスの自由」の亡骸に付き従って墓場へ行こう。そして、栄光に満ちた「幻影」のようなものが現れ、折れた剣と笏と王冠から成る王座を踏みつぶして埃にまみれさせたなら、「『自由の精神』が墓からよみがえり、野蛮で許しがたいすべてのものをそこに打ち捨ててきたのだ」と言おう。そして、膝まづいて、それをわれわれの「女王」として崇めよう。

#### ◆ キャメロン氏の見解に対するコメント ◆

① まず、第1段落の『『声明』は厳密には改革に関するものではなく、3名の処刑そのものを扱っているのだ』という見解について――『声明』はその性格上、シェリーの主張を広く世間に訴え、それが受け入れられることを目的にしているので、内容がどうしても具体的なものにならざるを得ないのである。しかし、シェリーはこの「事件」の前に『イギリス全土で議会改革の是非を投票に委ねようという提案』なるパンフレットを発表し、直後にこの『声明』を、しかも同じ「マーロウの隠者」という筆名で出している。このことから、『声明』は『提案』の延長線上に位置するものと考えられるのであり、当時の最大の政治問題が選挙法改正であったということをシェリーは十分に認識していたものと思われる。また、第8章において、政治・経済の両面において破綻した政府に対して「民衆は大声で、国民の自由な選挙制度を要求した」という記述があり、第9章においては、「国民の自由な選挙制度の要求」に対し、政府は陰険な方法で弾圧に乗り出した、と書かれおり、また、「すべての民衆が議会制度改革を求める声を上げるや」ただちにスパイが放たれた、と書かれている。つまり、3名の処刑の原因は選挙法改正運動であった、言いかえれば、選挙法改正運動に対する弾圧の結果が3名の処刑であった、とシェリーは考えたのである。以上のことから、氏の見解は誤りであると思うのである。

② 第3段落の「シェリーは死刑廃止を提案している」という点について――氏が引用しているのは『声明』の第6章である。これはなるほど死んだ王女と処刑された3名を対比させてはいるが、処刑の際の家族の精神的苦痛を描いたものであって、第10章の処刑の場面の描写とともに『声明』の一連の流れの中の一部にすぎない。この章には「いかなる原因にもせよ、人間が人間の命を奪うことほど恐ろしいことはない」という記述もあるが、これらは「政治的扇動よりも人道主義にもとづく抗議」ではなく、むしろ、残酷な事実を淡々と述べることによって読者にかえって強い衝撃を与えようとする「声明」としての効果をねらったものにすぎないであろう。したがって、それをさらに敷衍して「シェリーは死刑廃止を提案している」とまで言い切れるものかどうか。また、こういった現象面

# THE EXAMINER.

No. 515. SUNDAY, NOV. 9, 1817.

## THE POLITICAL EXAMINER.

Party is the madness of many for the gain of a few. Pope.

No. 500.

### DEATH OF THE PRINCESS CHARLOTTE.

WHAT words to write! *Death of the Princess CHARLOTTE!* The death of one, who stood as it were before us on the very top of existence, and in the full bloom of life and enjoyment!—This event has smitten the nation with sudden doom, like the visitation of a darkness. It is no oratorical flourish to say so; it is matter of fact; and the cause is to be found in our common nature. It is an abrupt check given to all one's ideas of youth, hope, and prosperity. The Princess CHARLOTTE was so young, was understood to be of so sanguine a temperament, and was apparently so healthy and happy, that for human nature's sake alone, every body, who had any sympathy with his species, not only wished she might long so continue to enjoy herself, but had made up his mind that such would probably be the case. Nay, he had not made up his mind, for he had not thought of the possibility of the reverse;—and now!—

The first and greatest feeling of the country on this occasion is certainly not a political one: it is real sorrow and sympathy; and no mourning for a Prince will have been so genuine for a long series of years. If any dreary heart in sentiment should ask why the sorrow is so great in this young woman, any more than another, we answer, because this young woman is the representative of all the others,—because she stood on high, in the eyes of all, embodying as it were the ideal as well as actual images of youth, and promise, and blooming womanhood,—and not only these, but the images of happy love and wifeliness, and approaching maternity. The Princess CHARLOTTE's marriage, unlike those of princes in general, has always been understood to have been one of her own choice. The circumstance seemed every way probable, from evidences of another sort, from the union of spirit and tenderness which was observable in her disposition, from the personal appearance as well as reported character and manners of Prince LEOPOLD, and more than all, from the life which the young couple have led since their union. There was not a mere town life, glad to separate, or hurried about in a bustle amounting to separation; they lived almost entirely in the country, and were entirely so; and it is understood that they spent their enjoyments and occupations. They are said to have taken particular delight in teaching one another what they respectively knew,—one of the most delightful marks of attachment; and the Princess was seldom or never seen in public without her husband,—one of the most marks (where it is possible) that a couple can take to be far out of each other's sphere.—It is not wonder that the people who were about the Princess, or in the immediate neighbourhood, feel the

loss severely, setting the more vulgar interest they had in them aside. They afforded them a pleasant habitual thought. All that is sweet or striking in the idea of two such persons to the rest of the country, must there have had double effect; for we do not hold with the common saying about nobody's being a hero or heroine with those about them. If the general character of the parties is amiable, and they shew above all an unaffected and continued sympathy with such as come in contact with them, their little human infirmities only serve to render them agreeable to our self-love. In Prince LEOPOLD and his Consort the neighbourhood saw a young couple, in whom the splendour of rank only served to render their real happiness more conspicuous. It brought the best part of private life into the daylight without violating the real delicacy of it. To the old, they were like a pleasant remembrance, or a lift into the age to come; to the young, they were hope and admiration. To the dullest, they gave a sense of the pleasurable and affectionate, by dint of the rank through which it was conveyed; to those who did not care for rank, it was delightful to see that rank had nothing to do with the matter at heart; and to the romantic, the sight had something in it of the high and happy prosperity of a fairy tale. The maidens wished for such a husband as Prince LEOPOLD; and the young men thought how delighted and flattered they should be by a wife above their station, who could love them so well. For the most touching feature of this union ought not to be forgotten; and that is, that it was not only an union of choice on the part of the Princess, but that she seemed to pronounce it so more and more every day, and was as fond of her husband as the most voluntary and happy bride in private life. The gorgeous and sovereign part of royalty appeared perhaps only something which Fortune had in store for them, when they were willing to accept it,—as a luxury of which they had no need at present, but to which they could look in the superabundance of time,—in the richness of the distance. But whether they thought so of it or not, or whether it would so have turned out, is not now the question. By the very force of circumstances, and of their time of life, they had riches, admiration, leisure, youth, hope, and enjoyment; and all was doubled by partaking. This glad security has been undone;—this garland of vernal intercourse is snapped;—this smiling abundance has left its place vacant;—this picture of two happy social creatures, leaning upon each other, is dashed by some awful hand into a portrait of premature loneliness. "One is taken, and the other left."

We can much better dwell however upon general recollection, than think of what must be suffered by this "other." The trial of Prince LEOPOLD is said to be severe; and we can believe it. Every thing conspires to make it so; and if every thing did not, a heart such as his is said to be would be stricken enough. If we were among his consolers, we would not attempt to disguise the extent of his loss; we would not talk about it; but we would not contradict it; we would agree with him, and

を強調することは、この「事件」の本質を見失うことにもなるだろう。

③ 第4段落の「共和主義的な口調」について——『声明』の最後の部分が共和主義的であるとするなら確かにそのとおりであるが、氏がこの部分を以て『声明』の主旨であるとするのは、いささか短絡的であろう。というのも、『声明』は厳密には改革に関するものではなく、3名の処刑そのものを扱っているのだ」という前提から出発した氏の見解は、議会改革すなわち選挙法改正の問題を抜きにして「共和制」に結びつけているからである。『声明』の主旨はあくまでも選挙法改正であり、それによって共和制が実現し、そのことが究極的には自由の獲得、さらには人間の解放につながっていくのだとシェリーは述べているのである。この点を踏まえて「共和制」という言葉が使われなければならないのである。

〔資料〕 『イグザミネー』 第515号, 1817年11月9日(日)\*

### CONVICTS FOR HIGH TREASON.

DERBY, Nov. 5.—*Brandreth and Weightman*, as soon as the Rev. Mr. Pickering, who is very assiduous and humane in his attentions, left them, took their usual walk. Brandreth got a long

※ 『イグザミネー』の引用文について——

『イグザミネー』第515号の冒頭部分に

Party is the madness of many for the gain of a few. POPE.

(政党とは少数者の利益を図るための多数者の愚行である。ポープ。)

という文が掲げられている。この文の出典を知ろうと *The Oxford Dictionary of Quotations* (Oxford University Press, 1941. Second edition, 1953.) でキーワードの 'madness of many' を手掛かりに調べた。用例は二つあった。すなわち、ポープ (Alexander Pope, 1688-1744) の項に——

Party-spirit, which at best is but the madness of many for the gain of a few. (*Letters. To E. Blount, 27 Aug. 1714*) とあり、

スウィフト (Jonathan Swift, 1667-1745) の項に——

Party is the madness of many, for the gain of a few. (*Thoughts on Various Subjects*) という文が載っていた。

つまり、『イグザミネー』の引用文はスウィフトのそれに酷似しているのである。このことから、出典はともかくとして、「引用文は明らかにスウィフトのものであるはずだが」と思い、巻頭に掲げられている文の筆者を1808年1月3日(日)付の創刊号から調べてみた。一貫して文は同じだが、筆者は最初、スウィフトになっていた。ところが1815年3月26日(日)付の第378号の引用文には注が付けられていて、以下の理由でポープに変更されたことが述べられている——

我々はこの文をスウィフトとポープの著作を集めた一冊の本から採ったのであるが、最近、これは前者のものではなく後者のものであるという指摘があった。しかし、そのとき我々にはそうではないと結論づけるに足る十分な理由があると考えたのである。しかしながら、我々はその後、別の読者の指摘によって、先の考えが正しいと確信するにいたった。それで作者の名を現在のものに変えたのである。

このような経緯で筆者がポープになったことが分かったが、今となってはこの判断が誤りであったことは明白である。

new pipe in his mouth, which he held by his right hand, while he kept his left hand in his jacket. He dashed his chains about as if he felt them not, and seemed quite composed and at his ease while he looked coolly around him and smoked his pipe. Observing several spectators staring with much astonishment at him through a small grated window, he fixed a steady look of contempt and indifference on them whenever he came to that [corner] of his walk. He seems extremely attentive at every exercise of religion and devotion, but he steadily resists every enquiry into his former history, or into the circumstances that led into the last fatal adventure. When any questions of this kind are urged, he replies, "I'll say nothing upon that subject." — "I will not implicate others." At first he had said that he deserved to die; whether he should die for murder or treason did not signify. He now questions the justice of his sentence, and asks, "Who saw me shoot the man? What proof have they that I killed any one?" — Far different are the convictions and feelings of *Turner* and *Ludlam*. They are extremely penitent, and join with solemn earnestness and melancholy resignation in every act of devotion. Ludlam often inquires with much anxiety and sympathy whether Brandreth is become properly sensible of his offences, and has with due penitency implored the divine mercy. Turner was this day visited by his mother, his brother, and his sister, (another brother, *Edward Turner*, is among the re-prieved prisoners); their affection for one another appeared to be very strong; their parting was most painful and affecting. Both Turner and Ludlam declined to walk. They are in the very deepest distress, but calm and resigned. They are now in quite a different part of the gaol from Brandreth and Weightman, so that they can have no communication. — Turner got a copy of the Prayer-book from Mr. Pickering, and presented it to his sister. He said he hoped that a book given in such circumstances would be afterwards read with much greater attention and profit. Ludlam has sent for a copy of "Baxter's call to the Unconverted," which he is to present to his son with the same intention.

---

#### EXECUTION OF BRANDRETH, TURNER, AND LUDLAM.

DERBY, Nov. 7. — Before we detail the circumstances that attended the last awful scene of the distressing drama which ignorance, delusion, and discontent have lately exhibited in this place, we beg leave to mention a few particulars of the conduct of the wretched victims of the law on the day preceding the execution.

It will be recollected that Brandreth latterly spoke less favourably of his trial than he had done at first. He was heard occasionally to mutter, "OLIVER HAS BROUGHT ME TO THIS." "BUT FOR OLIVER I SHOULD NOT HAVE BEEN HERE." On Thursday morning, the Rev. Mr. Pickering said to him, that it was well-known where Oliver was for several days before the insurrection, and that it could be proved he was not with him. He made no reply. He was then asked how he came to engage in such an enterprise. He said he would answer no questions of that kind, and begged that he might not be troubled with any. The clergyman asked him if he felt no dread of the death that was now so near; he replied coolly, "I feel no dread." He afterwards prayed in the hearing of a clergyman, who remarked to him, that he had expressed no contrition for the murder he had committed. He said he felt no contrition on that subject. Thus he continued, ready to join in any act of religion, insensible of any remorse, and proof against

all fear. At half-past 3 in the afternoon he took his usual walk. It rained pretty heavily, and his heels were seen bare through his worn-out stockings: yet he walked backwards and forwards as if both his mind and his body were perfectly at ease. At the same time, his features and looks had no symptom of insensibility. *George Weightman* was labouring slowly and heavily along, with his massy chain clinking at his heels; the reprieved prisoners were singing hymns in the adjoining rooms; Brandreth was quite regardless of all.

*Turner* and *Ludlam* declined again to move out of their cell. *Ludlam*'s sons, his brothers, and his sister saw him for the last time. They prayed together with an earnestness and a fervour that were quite overpowering. They were all dreadfully agitated at parting. Yet *Ludlam* shortly afterwards said he had feared it would have been worse. *Turner*'s brother saw him again on this day (Thursday), and their final parting was deeply affecting. Both *Turner* and *Ludlam* were extremely penitent. They protested they never should have moved in the unfortunate affair but for Bacon and Brandreth. They blamed Thomas Bacon more particularly, and said they considered him as the author of all the mischief. *Turner* had been with Brandreth on the 6th, 7th, and 8th of June. They both continued to express much anxiety that Brandreth should become penitent and sorrowful for his cruelties and bloodshed. *Ludlam* expressed a strong wish that the people would hereafter be submissive and obedient to the King and the Laws.

This morning *Ludlam* and *Turner* looked shockingly wan and spiritless. They had watched the whole night in prayer and psalm-singing. At nine the Chaplain visited them, and assisted them in their devotions. They afterwards continued to pray aloud till the moment of immediate preparation arrived. Their expressions were always the same:—"O Lord, have mercy!" "O Lord, save my soul!" "If I am on a bad foundation, upon a sandy foundation, O Lord, take it now away, and set me upon the rock." "O pardon all my sins for the sake of thy Son, who died once for all mankind." "O Lord, come now with thy strength, and support my soul." While the one fervently uttered these expressions, the other kept answering "Amen." Then the other took up the prayer, and was accompanied in the same manner by his companion. Their voices were dejected in the extreme.

Brandreth slept as usual, rose in good spirits, and showed no sign of despondency or fear.

From an early hour in the morning the scaffolding and drop were erecting in front of the gaol, and a considerable number of persons were collected in the street, quietly looking on, and listening with visible alarm to each sad note of preparation.

At half-past ten all the prisoners went to the chapel. *Ludlam* and *Turner* looked like walking spectres. Brandreth stepped forward firmly. All the other prisoners appeared to feel much sympathy. At the same moment the crowd without felt some trepidation on seeing the horse led into the gaol that was to draw the hurdle along the yard.

At half-past 11 all the prisoners, excepting the three men to be executed, and *George Weightman*, left the chapel. All held their handkerchiefs to their eyes, and sobbed deeply. Shortly after they had come into the yard, *William Turner*'s brother, *Edward*, shrieked horribly, and was carried into a room by two men. The Chaplain then administered the sacrament to the four convicts.

At 12 precisely, *Mr. Simpson*, the under-sheriff, appeared with a few javelin men, and a considerable number of special constables. The prisoners then descended from the chapel to the

room which Brandreth and Weightman had occupied. Here their irons were knocked off. Turner and Ludlam kept praying all the while. When Ludlam's chains were knocking off, he exclaimed, "O Lord Jesus, Thou art tender-hearted, O be now my portion."

At a quarter past 12 the hurdle was drawn up at the door of this room. It was a very simple machine, formed of a few boards nailed upon two long beams. Brandreth came out first, and, while placing himself on the hurdle, said, "Some one hold me, lest I fall off." A man held him while the horse was driven slowly round the yard. He nodded to the several prisoners as he passed along.

William Turner was next drawn on the hurdle. When he came close by the other prisoners they all screamed and wept most bitterly. When Isaac Ludlam was placed on the hurdle, he clasped his hands and raised a fervent look towards Heaven. The prisoners cried out still more bitterly. Turner and Ludlam kept their eyes shut while on the hurdle. Brandreth and Turner were kept in a narrow passage of the gaol till Ludlam joined them. He, seeing them stand there, asked if he might not walk there for a little. Turning to the Chaplain he said, "You remember what I mentioned to you," (we believe something relating to his family). They then proceeded immediately in the same order to the scaffold. Brandreth looked coolly around upon the immense multitude of spectators, and in a loud and firm voice said, "God be with you all *and Lord Castlereagh.*" He stood resolute and silent while the executioner adjusted the rope round his neck.

Turner came out next, and advanced with unusual firmness of step. While the executioner was putting the rope round his neck, he exclaimed loudly and distinctly, "THIS IS ALL OLIVER AND THE GOVERNMENT." The Chaplain at this moment came in front of these two, *and prevented any further observations.*

Isaac Ludlam came out last, and when the rope was applied to his neck, devoutly said, "I receive this at the hand of the Lord:" then raising his voice to a louder pitch he prayed thus:—"O may my soul now tower up to glory. O may I now go where angels and saints worship thee. May I meet this great concourse of people in Heaven. O Lord, I pray for high and low, rich and poor, bo[u]nd and free. May this awful dispensation of thy providence be sanctified." Here the Chaplain's voice in prayer having become louder than Ludlam's, Ludlam ceased to [use] any expressions of his own, and joined the Chaplain by repeating, "Amen" to every particular petition.

They all repeated the Lord's Prayer very distinctly, and immediately afterwards the rope fell.

Brandreth appeared perfectly composed during the whole time. He held a black silk handkerchief (the same which he had worn at the trial, and which had just been taken from his neck) in his clasped hands while at their last devotions. This he held exactly in the same manner after life forsook his frame. He dropped quite still, and seemed dead at once. His beard, which remained untouched, looked very frightful from underneath the white cap that was drawn off his face. Turner, too, seemed sufficiently firm in his last moments, and died quietly. Ludlam while praying, immediately before the drop fell, was visibly agitated, and seemed to die with much pain, for he was repeatedly convulsed after he had been thrown off.

The drop fell a quarter before one, and at a quarter past one they were cut down. Their coffins were piled upon the scaffold. The block, a long piece of timber, supported at each end by

pieces of a foot high, and having a small cog laid across the upper end of it, on which the neck of the body was to be placed, was placed at the other extremity of the scaffold. Two axes and two knives, with black handles, were at the same time exhibited. Some sawdust was then strewed on the scaffold. The crowd, considerably more than 6,000 persons, kept together all this time. Brandreth's body was then laid upon the block, with the face downwards, and the head towards the street, in the full view of the people; the scaffold not being more than ten feet from the ground. The executioner raised the axe, and struck at the neck with all his force. *At that instant there was a burst of horror from the crowd.* The executioner then took up the head, and holding it by the hair addressed the people, "Behold the head of Jeremiah Brandreth, the traitor." Hitherto the multitude had been quiet and motionless. *The instant the head was exhibited, there was a tremendous shriek set up, and they ran violently in all directions, as if under the impulse of sudden phrenzy. Those that resumed their stations groaned and hooted.* The javelinmen and constables were all in motion, and a few dragoons, who had been stationed at both ends of the street, drew nearer with drawn swords! But all became immediately calm. Very few of the immense multitude now remained, and these looked quietly on while the heads of Turner and Ludlam were successively exhibited in the same way. The heads and bodies were then thrown into the coffins, and all spectators dispersed!

#### 参 考 文 献

- Ingpen, Roger, and Walter E. Peck, eds. *The Complete Works of Percy Bysshe Shelley*. 10 vols. London: Ernest Benn, 1926-1930 (Julian Edition), rptd. New York: Gordian Press, 1965.  
 Jones, Frederick L., ed. *The Letters of Percy Bysshe Shelley*. 2 vols. Oxford University Press, 1987.  
*The Examiner*, 15 vols. Pickering & Chatto, Part I: 1996, Part II: 1997, Part III: 1997.

\*

Cameron, Kenneth Neill, *Shelley: The Golden Years*. Harvard University Press, 1974.

\*

大野真弓編『イギリス史（新版）』（世界各国史1）山川出版社 1965年（第3版 1970年）。

G.M. トレヴェリアン『イギリス史』全3巻 大野真弓監訳 みすず書房 1975年。

『イギリス史』（世界歴史大系）全3巻（1. 先史～中世：青山吉信編，2. 近世：今井宏編，3. 近現代：村岡健次・木畑洋一編）山川出版社 1991年。

川北稔編『イギリス史』（世界各国史11）山川出版社 1998年。

\*

『小学館 ランダムハウス英和大辞典』〈特装版〉小学館 1973年（第2版 1994年）。